アフリカの国ってどんな国だろう？

代表者　松本　海奈

■ 目的 ■

主催者は実際に周囲にいるアフリカ出身者からうけるアフリカに対するイメージが、日本でイメージされているアフリカとは大きく異なる点があることを今まで感じていた。今後、実際にアフリカを訪問し帰国後に実際の現地の様子を日本で伝えたいと考えている。今、アフリカ訪問の前に長崎でアフリカと日本のかけ渡しが何かできないかと考え、この事業を企画した。

この事業を行う目的は 3 つある。まず１つ目の目的は子供たちに実際にアフリカ出身者と出会ってもらい、アフリカの生活について知ってもらうことだ。遠いアフリカの国々について、日本からはなかなか正しい情報が得られないのが現状である。実際にアフリカに住む同世代の小学生がどのような生活を送っているのかを知ることで、長崎で暮らす自分達と大きく違う点もあれば、同じ点もあることに気づくことを目標にしている。

２つ目の目的は、新しい事を知る楽しさを感じることである。「へえそうなんだ」という気づきを増やし、「楽しい」と感じる事により、「より物事を知りたい」という気持ちが沸くと考える。今回の事業を通して、１つでも子供たちが「へえそうなんだ」と感じることが目標である。

３ つ目の目的は、ステレオタイプの形成を防ぐ事である。実際にステレオタイプについて卒論を書いた知人がおり、黒人＝怖いと思われるという事実に衝撃を受けた。調査を数値化したわけではないが、小中高の ALT は白人やアジア系人が多いと感じる。この目的は今回のイベント一回で達成できるとは考えていない。しかし、確実にこの目的を達成するためのスモールステップとなる。

対象を小学生とその保護者と設定した理由は、小学生の好奇心旺盛さと、その保護者にも海外のことをもっと知ってもらいたいと考えるからである。観光地でアルバイトをしていた際、多くの修学旅行生や外国人観光客を見かけた。中学生の方が英語を話せるにも関わらず、小学生の方が積極的に外国人に話しかけていた。そのため知らないことを知る今回のイベント対象は、小学生が適当であると考えた。また、小学生の子供たちの行動や経験は親の考え方が大きな影響を与えている場合が多い。そのため保護者にも同時に学んでもらう事がより効果を上げると考え、親子参加を設定した。

■ 活動内容 ■

①ケニア出身者に実際に来てもらい、通訳を介しながらケニアについて知る。まずケニアについての基本情報（国旗、場所、大きさ、気温等）について紹介する。

②ケニアの生活についてより深く紹介するが、内容は小学生の日常に溢れているものを取り上げる。（学校生活、食事、家、遊び等）ただ紹介を聞いてインプットするだけでは集中力が持たないため、クイズを使用して小学生参加型で行う。今回は Kahoot!というオンラインのウェブサイトを使用して、クイ

ズを作成する。

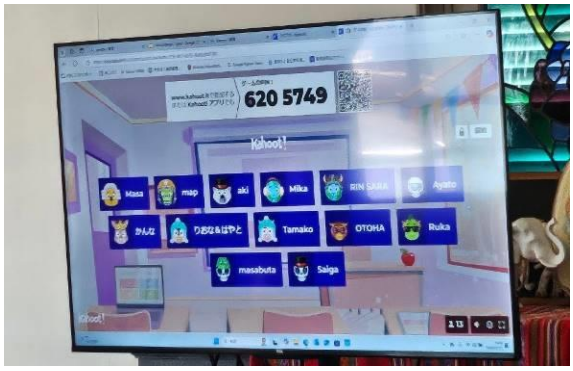
③スワヒリ語をみんなで学ぶ。

※開催日時等

日時:2024 年 12 月 22 日(日)14:00～15:30

場所:地球館　２階

参加人数:18 名＋保護者



写真② Kahoot!クイズの様子

■ 活動の成果 ■

参加者は全部で子ども１８名＋保護者となり、予定よりも多くの人が足を運んでくれた。

・目的１に対する成果

ケニアの簡単な説明の中で野生動物を間近で見ることができると紹介したからか、馬に乗って登校すると回答した子どもも一定数いた。しかし正解を見て長崎で住む自分たちと同じようにバスや徒歩で通うことを知り、驚きとともに「私たちと一緒だね」などの気づきの言葉も見受けられた。Kahoot!を使用したが初めにどのように Kahoot!を使用するのか、簡単な練習問題を行ったことで子どもたちがどのように使用するのか理解することができ、本クイズをより楽しんでくれたように感じた。Kahoot!を利用したことは初めてであったようだがこの取り組みは保護者も満足していた。即時に解答が出ること、即時に回答者のランキングも出ることから通常のクイズ形式よりもより活発に活動ができた。日本ではまだあまり活用されていない形式であるが十分な効果を発揮できた。また最後のケニアの言葉であるスワヒリ語を学ぶ時間に、子供たちは、特に活き活きし顔をあげて声を出して真似していたので、話すなどの動きのある活動がやはり効果的であると実感した。「ありがとう」という意味のスワヒリ語をイベント後、帰る際に言って帰る子もおり、嬉しかった。

・目的２に対する成果

活動後ケニア出身の講師のもとに質問したいと列を作っていた。具体的には「ケニアにはランドセルはあるの？」「ケニアの国旗は何を意味してるの？」などがあった。インターネットと通じ AR を活用した地球儀を準備していたが、講演後に子ども達が地球儀の周りに集まってアフリカはもちろん他の国々の情報を見ていた。子供たちの「もっと知りたい」という気持ちがしっかりと行動に繋がっていた。

・目的３に対する成果

事業中の子どもの様子や事業後の保護者アンケートから、「黒人＝怖い」という印象をもって今イベントの活動を終了した子ども、保護者はいなかった。ネガティブステレオタイプを形成しないことに少しは貢献できた。

■ 課題と今後の事業展開 ■

一定数の親子連れに需要があることを今回のイベントを通して実感できたため、次回以降も今回のようなイベントを継続したいと思う。実施後のアンケートでは「実際にこのようなイベントがあればまた参加したい」と100%の保護者が回答している。また今回のイベント準備を進めていると「ほかの年代を対象に行ってほしい」という意見もあった。小学生以外を対象に行うことも今後の展開の視野に入れたい。次回以降は今回のイベントとの相違が必要となるためアイデア出しを工

夫する必要があると考える。子ども達はクイズに回答する時、スワヒリ語を話す時が最も活発的であった。今後も「触る・話す」などの体を動かし、五感を刺激する活動を中心にしたい。

また開催する場所について、今回のイベントは参加者が想定以上となったため、会場の都合上子どもと保護者を別々に座らせることとなった。子どものみで席に座わる形式はあまりよくないかと感じ、心配であったが予想外に子ども達は集中して聞いていた。途中で集中力が切れた時にドリンクを触ったりする子もいたため、今後行うことがあれば公民館など飲食の出ない場所を使用したい。尚、今回のイベントの対象年齢は、小学１年生から６年生までと幅が広かった。低学年と高学年の生徒では集中力・興味関心に大きな差が出ることを実感した。対象年齢より細かく絞ることも必要になると実感した。

今回このイベントを実施することは主催者にとっても大きな学びとなった。最初は不安が大きかったが多くの方々に協力いただき無事に開催できたことは自信につながった。改善点等もわかったので次回はさらに良いイベントにしたい。今後、微力ではあるが長崎の子ども達や長崎の人々とアフリカの橋渡しができればと強く考えた。